

歴史系博物館展示を効果的な学習材とするための展示手法の研究

小川 雅弘*¹ 堀田 龍也*²

<概要>博物館を利用した学習活動事例は多く報告されてきている。また、歴史系博物館展示の見学では、資料を見る目がないと学習活動とはなりにくいと指摘されている。本研究では、資料を比較・考察することを目的としたWebページを提供し、児童の学習活動を分析した。また、資料観察の専門家である、学芸員の資料観察の視点を分析した。その結果、これから歴史学習を始めようとする学習者に対し、学習材として提示する際に効果的であると考えられる視点が整理できた。

<キーワード>博物館教育, 専門情報, 教材開発

1. 現状と課題

学校教育では、校外学習や遠隔授業などにより、博物館などの社会教育施設を利用した事例が多く報告されてきている。また、博物館側でも、積極的に子供向けのホームページを開設したり、遠隔授業に取り組んだりしている(堀田2001)(北2001)。

博物館には実物資料と豊富な専門情報があり、これまでの取り組みによって、子供たちの学習への意欲の喚起を促す方策は示されてきた(小川ら2001)。

主体的な学びを期待するには、「見る目」を育成することが必要となってくる(有田2001)。

児童が調べ学習を行うために博物館を訪れ質問する際には、資料の名前・使われていた時代・使い方等の展示室の解説や書籍などで解決できる表面的な質問が多く、資料の特徴に関することや他の資料と比較して形が違う理由の考察など、博物館が期待している展示を観覧しての「なぜ」という疑問を解決するための質問はほとんど見られない。

資料観察の専門家である学芸員が、専門的知識をそれほど有しない資料を観察する場合の視点は分析されている(小川ら2004)。

歴史系博物館の場合、博物館側の展示意図と見学者の理解との間に大きな距離があって難しく分かりにくいことが指摘されている(倉田ら1981)。

博物館の教育機能の中心は、展示にあるとされている(倉田ら1981)。「もの」を見るための視点を例示したり焦点化したりすることが重要であることも指摘されている(伊藤ら1978)。

これらのことから、これまでの研究成果を分析し、歴史系博物館の展示に焦点を当て、展示

を学習材として提供するための要件を整理することは大切であると考えた。

2. 研究の目的

児童が、資料を比較・観察した学習活動の分析と、専門家である学芸員の資料観察の視点の分析から、歴史系博物館展示が学習材として活用されるための展示手法を検討する。

3. 研究の方法

児童が、展示を利用して学習活動を行う前に、資料を比較観察する先行的学習経験を得たグループ(Aグループ)と、その経験を持たないグループ(Bグループ)が、展示室にて、資料を比較・考察した学習活動の様子を分析する。

資料観察の専門家である学芸員の資料観察の視点を分析する。

上記2点の分析結果から、望ましい展示手法について考察する。

4. 結果

資料を比較観察する先行的学習経験を得ることは、実物資料に対する観察学習に有効であることが示唆されていた。

児童が展示室にて、資料の比較観察学習を行った結果の詳細は表の通りであった。

比較対象とした資料数と指摘した違いは、Aグループが、資料184個から503の違いを指摘し、Bグループは、162個の資料から388の違いを指摘していた。資料1個当たりに見つけた相違点の平均は、それぞれ2.7と2.4であった。

Aグループが指摘した違いは、資料の材質や質感・形の違いによる使い方の違いなど様々な角度から指摘する傾向が見られた。

Bグループでは、単に違うとか技術が違うと

*1 OGAWA, Masahiro : 静岡県浜松市立瑞穂小学校 e-mail= masahiro@ogawa-wakuwaku.net

*2 HORITA, Tatsuya : 独立行政法人メディア教育開発センター e-mail= horita@horitan.net

いった抽象的な指摘が多く、形や質感など博物館が期待している資料自体に目を向けたものにまで及んでいない傾向が見られた。

また、調査時期までの既習事項と関連付けて違いを理由を記述できた子どもは、Aグループ25名、Bグループ3名であった。

表 主な比較観察結果

	Aグループ(74名)	Bグループ(76名)
展示室内資料で比較観察を行った児童	45名	28名
展示資料と身近な道具を比較した児童	29名	45名
比較観察が行えなかった児童	0名	3名
比較観察後違いの理由を記述した児童	70名	64名
既習事項と関連付けて考察できた児童	25名	3名

資料観察の専門家である学芸員の観察の分析結果では、全体観察から詳細観察へと視点が移動し、学芸員の観察の視点として、以下の視点が指摘されていた。

- ・ 学芸員の資料観察の視点には、資料に関する知識に基づいた視点と、観察の方法に基づいた視点がある。
- ・ 学芸員が初めて見る資料を観察する場合には、全体観察から詳細観察へと視点が移動している。
- ・ 学芸員は、資料に関する知識に基づいた観察の前に、情報を引き出すための観察の視点に基づいて観察している。

5. 考察

児童の資料観察結果に見られた違いは、事前の観察学習経験で、資料の全体像の比較にとどまらず、それぞれの資料の細部にまで目を向け詳しく観察することを練習したことが効いていると考えられる。

既習事項との関連付けでは、事前の経験のある児童は、その経験を生かし観察の視点を決め、その視点に基づき観察を行うことができたため詳細な観察ができ、経験のない児童は、視点を決めるのに時間がかかったり、比較観察する対象を選択したりするのに時間がかかったりした影響があると考えられる。

学芸員の資料観察からは、特に資料そのものに関する知識を有しない場合、資料そのものの観察にその中心を置くのではなく、資料の全体

像や周辺情報など、資料に関する知識をそれほど必要としない観察から入り、考えられる仮説を資料の観察で検証するような方法を用いていることが指摘されていた。

6. まとめ

これらから、歴史系博物館において、展示を学習材として利用できるようにするためには、専門的な知識を伝達するための展示ではなく、資料そのものの観察の仕方に焦点を当てた展示手法を用いることが有効ではないかと推察される。特にこれから学習を始めようとする学習者に対して、学習材として提示するには、以下のような視点が大切であると整理できた。

1. 専門的な知識を必要とする情報を初めは提供しない
2. 専門的な知識が無くても比較観察できる展示手法を用いる
3. 解説などに頼らず資料観察できる展示手法を用いる
4. 先行的な学習経験を生かして次の学習ができる資料提示を行う
5. 展示室内で繰り返し上記の演習ができる場を用意する

参考文献

- 堀田龍也(2001) 教室に博物館がやってきた, 高陵社書店
- 北 俊夫(2001) 博物館と結ぶ新しい社会科授業づくり, 明治図書出版
- 小川雅弘・堀田龍也(2001) 博物館の専門情報を学校での学習場面で利用するための提示方法の事例研究, 日本教育工学会研究報告集, JET01-3, 101-106
- 小川雅弘・堀田龍也(2001) 資料を比較・考察する学習を促すWebページの開発と評価, 日本教育工学会大会講演論文集Vol.17, pp. 733-734
- 有田和正(2001) 総合的学習で求められる教材開発力, 明治図書出版
- 小川雅弘・堀田龍也(2004) 観察的視点を育てるWeb教材の開発に向けた学芸員の視点の分析, 日本教育工学会大会講演論文集Vol.20, pp327-328
- 倉田公裕他共著, 博物館学講座8 博物館教育と普及, 雄山閣, 1981
- 伊藤寿朗・森田恒之編著, 博物館概論, 学苑社, 1978